

関係フレームスキル訓練オンラインシステム「Enable360」の有効性 ：支援スタッフへの導入事例から

○香川 紘子（株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所 研究員）
刎田 文記（株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所）

1 背景と目的

関係フレームスキル（以下「RFS」という。）は、言語の生成性を促進する基盤と考えられており、知的能力や認知機能と相関することが示されている。また、多くの例題で構成された体系的な見本合わせ訓練を実施することで、対象者のRFSが向上することも示唆されている¹⁾。そこで、（株）スタートラインでは、業務遂行に困難を抱える就労者への支援に、RFS訓練が有効であると考え、弊社のオンライン雇用支援サポートシステム「Enable360」上で、数百種類のRFS訓練をPC上で簡便に実施できる訓練を開発した。本研究では、X社の支援スタッフに対し、オンライン雇用支援サポートシステム「Enable360」を導入し、定期的にRFS訓練を実施した際の効果について、訓練の実施状況やスタッフの変化等から、RFS訓練の有効性と実用性を検討することを目的とした。

2 方法

(1) Enable360上のRFS訓練

「Enable360」は雇用支援サポートで用いる、様々なコンテンツを実行できるオンラインシステムである。RFS訓練に関するコンテンツでは、オンライン上の見本合わせ課題で、より効率的に訓練を提供できる（図1）。また、様々なレベルの課題が搭載されており、対象者のレベルにあつた訓練が可能である。本システムには、基礎学習となる見本合わせ課題が20種類、等価性を体系的に訓練できる課題が106種類、6種類の関係フレームをフレーム毎に訓練できる課題が72種類、合計198種類の課題が搭載されている（表1）。

(2) 参加者

参加者は、X社の支援スタッフ1名であった。参加者は、業務で不明なことや不安なことがあっても、周りにうまく伝えることができない、未習得スキルに対して回避的になり習得を諦めてしまう、という課題があった。

(3) 評価

ア RFSアセスメントテスト（以下「RFSA」という。）

弊社研究所で開発したRFSの評価シートであるRFSAを訓練の実施前後に行った。RFSAは、8種類の関係フレーム毎のスキルと複数のフレームを組み合わせるスキルについて評価できる計9枚のシートで構成されており、それぞれに6つの設問が設定されている。設問は、刺激の数と問われる等価関係の構造により6段階の難易度となっている（図2、図3）。

イ 行動の記録

月に1回、参加者及びその上司とMTGを行い、訓練結果の確認やフィードバック、日常業務に関する様子等を聴取し記録した。

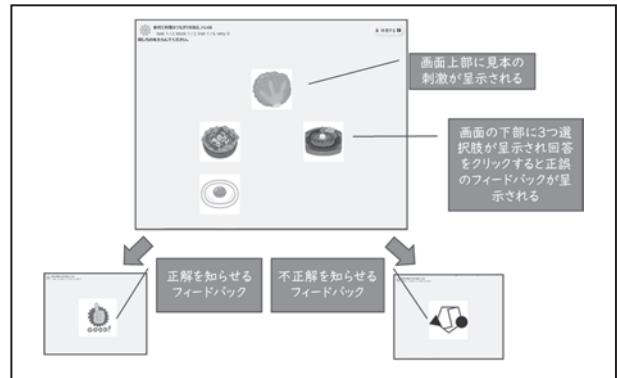


図1 「Enable360」で実施できる見本合わせ課題の例

表1 「Enable360」で実施できる訓練課題の概要

項目	内容	搭載課題種類数
基礎学習	動物・ひらがな・色などを題材にした見本合わせに取り組める	20
刺激等価性(等位)	反射律・対称律・推移律・等価律を構造別に訓練できる	106
関係フレーム	等位・反対・比較・区別・階層・視点の各フレームについて訓練できる	72
計		198

(4) 訓練

訓練実施期間は約8カ月であり、訓練課題は、表1に示した刺激等価性（等位）を行った。参加者は、週2回程度、PC上で訓練を行った。正答率が低い課題があった場合、その課題に合った補完方法を参加者に呈示し、参加者は補完方法を用いてそれらの課題を復習し、正答が100%になるまで課題を繰り返した。

3 結果

(1) 訓練の実施状況

参加者が、訓練に取り組んだ総日数は51日間であり、1日当たりの平均実施時間は、9.14分であった。

(2) 評価

ア RFSA

図2と図3に、訓練前後に実施したRFSAの結果を示した。訓練前のRFSAの総得点は35点、訓練後は36点であった。得点の内訳を見ると、回答の傾向に訓練前後で質的な変化が見られた。関係フレーム別（図2）にみると、訓練前のRFSAでは、等位、区別、比較、反対といった基本的な関係フレームについての得点が低かったが、訓練後は等位、区別、比較の得点が上昇した。また、時間の関係フレームの得点にも上昇が見られた。一方で、反対や視点取得、階層といった項目の得点は減少していた。課題の構造別（図3）にみると訓練後の対称律の得点が上昇した。

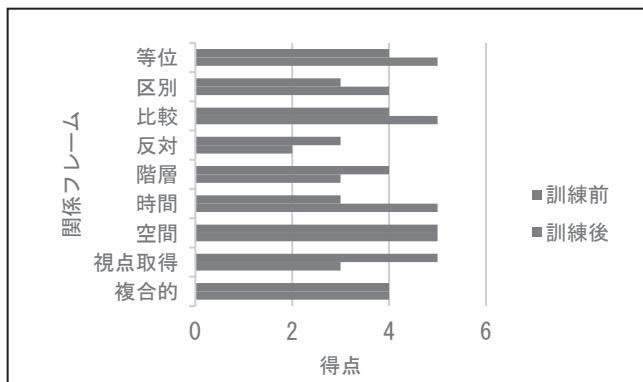


図2 RFSAの得点変化：関係フレーム別の得点

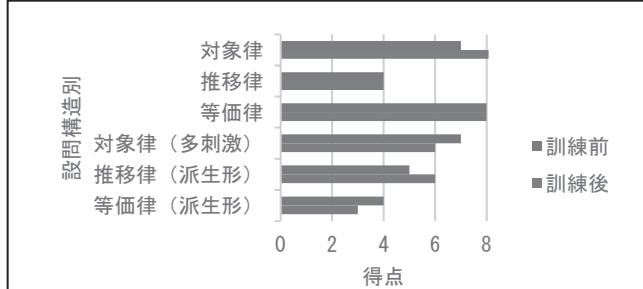


図3 RFSAの得点変化：設問構造の難易度別の得点

イ 行動変化

MTGで記録された参加者及び上司の発言内容の要点を抽出し、概要を作成した。

（ア）参加者の行動の変化・発言のまとめ

課題対応力の向上：訓練の初期には、課題の意図がつかめず混乱も見られたが、徐々にメモの取り方や考え方を工夫し、課題への理解が向上し、課題のつながりや意図を考えられるようになった。

気持ちの言語化と気づき：感情の弁別が難しく、業務の中で感情的になる様子がみられたが、訓練を通じて少しづつ感情を言語化できるようになった。さらに、自分の状態や他者の意図を考える視点が育ってきた。

業務面での成長：RFS訓練の後半になって、報告書の整理や面談の進め方（聞くポイントを絞るなど）に工夫が

見られ、改善が図られた。支援に対する理解も深まり、自信がついてきたと、本人は語っている。

行動の変化：訓練開始当初は、回避傾向や焦りが強くみられたが、自己ルール（自分でやらなくちゃいけない）を見直し、周りに助けを求め、無理のないペースで取り組む姿勢が見られるようになった。支援技術の習得にも、前向きに取り組むようになった。

（イ）参加者の上司の発言のまとめ

認知・言語面の変化：初期は気持ちを言葉で伝えられず、涙してしまうことが多かったが、言語化力や感情表現が向上し、徐々に言葉で自分の気持ちを伝えるようになった。自信がつき、前向きな発言が増えてきた。

業務遂行力の向上：報告書の質が向上し、修正が減少した。メモの取り方や面談トピックの整理も上達した。支援技術への理解と実践意欲が見られるようになった。

積極性・主体性の向上：自ら訓練の継続を希望するなど、新しいことに挑戦する姿勢や、支援技術への学びについても、積極性が見られるようになった。

課題と改善点：タスクの優先順位づけ、整理力に課題はあるものの、少しづつ改善している。課題点については引き続き、一緒に取り組んでいく。

4 考察

本研究では、「Enable360」を用いたRFS訓練の効果を検討した。参加者の訓練前後でのRFSに質的な変化が見られただけでなく、心理面および業務遂行面において肯定的な変化が報告された。RFSAの合計得点は、訓練後に1点の上昇のみが確認された。今回、参加者は「等価性（等位）」に関する訓練のみを実施した。そのため、等位以外のRFSに関する得点は安定せず、得点上昇が限定的であった可能性がある。今後は、等価性以外のRFS訓練を実施し、RFSAの得点にどのような変化が生じるかを観察していく予定である。一方、訓練後に参加者の心理面および業務遂行面で肯定的な変化が報告されたが、この変化がRFS訓練の直接的な効果のみによるものであるとは断定できない。しかし、等価性の訓練を通じて、参加者は恣意的な関係反応を派生しやすくなっている、業務場面においても既知の情報と未知の情報を結び付けるなど、新規の学習が促進され業務遂行が以前より容易になった可能性は考えられる。今後は、訓練で獲得されたRFSが、日常生活や業務において、どの程度効果があるかを評価する方法の確立が求められる。そして、本訓練の実践的有効性をより厳密に検討していきたい。

【参考文献】

- 1) Gibbs AR, Tullis CA, Conine DE, Fulton AA 『A Systematic Review of Derived Relational Responding Beyond Coordination in Individuals with Autism and Intellectual and Developmental Disabilities』, 「J Dev Phys Disabil Vol.36 No.1」, (2023), p.1-36